昭和46年 8 月22日発行通巻24号(毎日曜日発行)　昭和46年 2 月 5 日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日=ラルース

8/22
220円
24

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

総監修
岡田　　要　日本学士院会員
末廣　恭雄　東京大学名誉教授
古川　晴男　前東京学芸大学教授
宮地伝三郎　京都大学名誉教授
山階　芳麿　山階鳥類研究所理事長

編集委員
阿部　宗明　農林省東海区水産研究所技官
上野　俊一　国立科学博物館研究官
浦本　昌紀　山階鳥類研究所員
小原　秀雄　女子栄養大学教授
日高　敏隆　東京農工大学教授
堀越　増興　東京大学総合研究資料館助教授

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(２)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《１～64号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第１号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目　次

世界動物百科　第24号

カラーページ

食肉目　裂脚亜目
イタチ科（つづき）
シマスカンク属　8
シマスカンク　8
マレーアナグマ属　9
マレーアナグマ　9
アナグマ属　11
アナグマ　11
ラテル属　21
アフリカラテル　21
クズリ属　23
クズリ　23

表紙　アナグマ　Ph. A. Fatras
表３　**ギャラリー**　黒き猫　水尾比呂志

監修　犬飼哲夫（北海道大学名誉教授）
翻訳　小椋順子（独協大学講師）

私たちの仲間

ネコのなかの〝男と女〟　日高敏隆　3
ネコの行動学　3（最終回）

絶滅を防いだ50年の苦闘　藤原英司　4
アメリカバイソンの悲劇　7（最終回）

再び恐竜時代は来るか
（陸生動物の大きさを探る②）グループ・5プラス1　6
もうひとつの世界　19

漢字のふるさと　19
貉（あなぐま）　藤堂明保

カラーページ注・解説　犬飼哲夫　27
毛皮獣について――ミンクを中心に

尻と鼻と胸と　畑　正憲　28
ヒグマと２人のイノシシ　22

うぐいすの里　稲田和子　29
鳥獣むかしばなし　2

海中動物の生活　7　館石　昭　30
海底の深夜族

ペット相談室・仲間のひろば・裏表紙説明

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について
本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。
朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100 TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３－３　〒530 TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802 TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄１－３－３　〒460 TEL052－231－8131

次号予告

８月18日発売



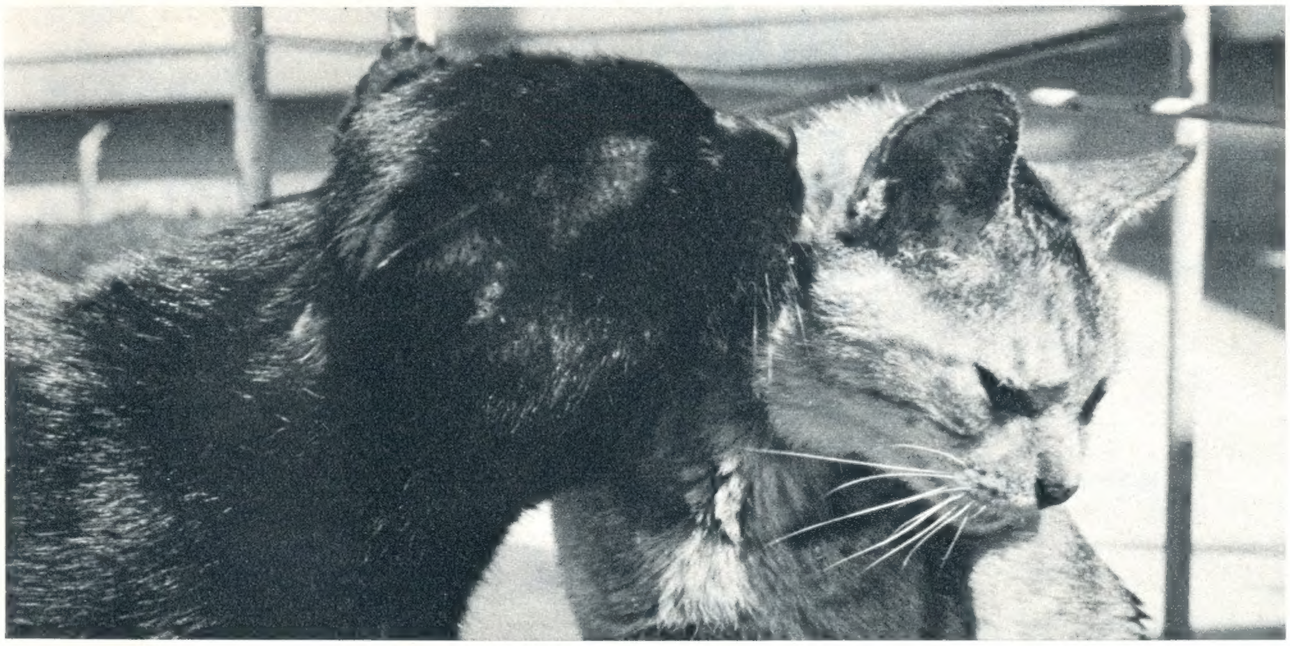
世界動物百科
25号　8／29

カラーページ
食肉目　裂脚亜目
□イタチ科（つづき）
ゾリラ属
ゾリラ
グリソン属
グリソン
タイラ属
タイラ
テン属
テン
クロテン
ムナジロテン
イタチ属
ヨーロッパミンク

私たちの仲間
ケネボク島の新しい家　畑　正憲
ヒグマと２人のイノシシ　23
次の巨大動物はナメクジか　G.5プラス1
もうひとつの世界　20
漢字のふるさと　20　藤堂明保
テン属の仲間たち　犬飼哲夫
カラーページ解説
〝渇き〟への抵抗　宍戸弘明
夏と動物（上）
蚕の始まり　稲田和子
鳥獣むかしばなし　3
海中動物の生活　8（最終回）　館石　昭

©1971 ASAHI SHIMBUN, Tokyo, pour la langue japonaise・Librairie LAROUSSE, Paris・RIZZOLI EDITORE, Milan.

私たちの仲間
24号…8月22日



恥じらう（？）雌ネコ（右）に〝愛〟をささやく雄ネコ

ネコのなかの〝男と女〟

ネコの行動学　3　最終回

日高敏隆

イエネコの雄は，雌ネコの発情が近づいていることを，外部からそれと認められるより，数日前から見抜いてしまう。そして，雌の近くを歩きまわり，そこらじゅうのものに頭をこすりつけてまわる。けれど雌ネコは，雄のこの求愛には，まだほとんど無頓着である。

そのうちに，いよいよ雌が発情する。発情した雌ネコは，まず雄ネコから逃げ，突然に雄が近づいたりすると，フーッとうなったり，金切り声をあげたり，前肢で打ったりして追いはらう。けれど，彼女の逃げ方はわずかになり，しかもゆっくりになっていく。これは，女の子がちょっと〝逃げるふり〟をしてみせるのと共通した要素をもつもので，一種の〝媚び〟である。

雄に対して，彼女があまり優位にたちすぎた場合，彼女はすぐ地べたにころがったり，からだを低くしてうずくまったりして，あたりを〝見まわす〟。それによって，雄が近づくように刺激するのである。すると，雄のほうもそろそろと雌に近づいていき，同じように地べたにうずくまって，低い声でおしゃべりをするように鳴く。こういう予備的な段階が，ときには何日も続く。

この時期には，家に閉じこめられている雌ネコは，1音節の高い鋭い声をたえず発している。雄ネコは雌ネコのすみかのまわりや，自分のホーム・レンジのなかを歩きまわり，雌ネコに向けて1音節または2音節の声を，さまざまに転調しながら発する。これは，他のネコに対する誘引または挑戦の声である。この声が長く引きのばされ，つながって長くなると，いわゆる交尾期特有のあの鳴き声になる。

この声は，ふつうは〝恋歌〟だと思われているが，そうではない。これは雄ネコどうしの闘争の歌である。

抵抗と交尾の生態

雌ネコのためらいは，しだいに消失していき，ついに，雄は突如として雌ネコの首すじをつかまえて，地べたに組み伏せる。

雌がまだじゅうぶんに交尾を望むところまでいっていないときには，雌はクルッと向きなおり，手で求婚者をひっぱたく。けれど，もうその気になっているときは，雌は抵抗なく地上にうずくまり，かかとが垂直に上を向くまで後肢を後方へのばし，腰を浮かせ，尾を軽くもちあげた形で横へやる。

雄ネコは彼女にのりかかり，雌の交尾姿勢がじゅうぶんでない場合は，後肢で交互に彼女の背を押えつける。それから雄は後肢を低くして，勃起したペニスを細かく注意深く前後に動かしながら，雌の生殖門をねらう。うまく生殖門に出会うと，急激に力強く押しこむ。そのとき，雌はうめくような声をたてる。雄もゴロゴロいうような声で鳴き，雌の首すじをグッと咬む。そして，急に後退する。たいていの場合，雌ネコは向きをかえ，フーッとうなりながら前肢で雄ネコを打つ。雄ネコはおこったように後退する。防御しようともしないが，逃げようともしない。雄・雌はくるりと向きをかえ，それぞれ自分の生殖器をなめる。しばしば，雌は地面にころがって，そこらのものに頭をこすりつける。

何分かすると，もう次の交尾が行なわれる。

首すじを咬む行動

雄の交尾衝動は，雌のそれより早く消失するので，何日かすると，しだいに雌がイニシアチブをとるようになる。媚びて逃げるふりをすることは，しだいにまれとなり，そのうち完全にやんでしまう。そうなると，雌ネコが雄ネコを追いかけるようになる。

ついに雌は，頭をこすりつけたり，激しいプレゼンティングをしたり，のりかかったりして，ますます意欲を失っていく雄を刺激せねばならなくなる。雌ネコはみずから交尾の姿勢をとって，後ろ向きに雄ネコの下にはいこんでいくことまでする。こうして，結局は雄もいやいや交尾に応ずるのであるが，首すじを咬む行動は，オルガスムスのときだけに限られるか，あるいはまったく消失してしまう。

ネコのこのような性行動は，ほかのネコ族のものとよく似ている。ただし，ヒョウの仲間では，首すじを咬む行動は交尾の絶頂においてのみあらわれ，イエネコの場合のように，まだためらっている雌ネコを押えこむために用いられることはない。いずれにせよ，雌の首すじを咬むこの行動パターンは，明らかに狩りの行動から由来したものであるという。

狩りの場合には，首すじに咬みつくとともに，歯をぐっと突き刺して獲物を咬み殺すのだが，交尾の場合には，もちろん咬み殺し行動は抑制されている。まだあまり交尾を望まない雌を後肢で押えつ



子ネコをかわいがる母ネコも，はたして人間のような〝愛情〟からなのだろうか



雄ネコのライバル闘争

ける行動も，大きな獲物に対する行動とたいへんよく似ている。

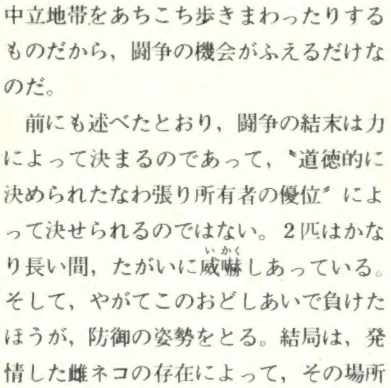
はかり難い雌の〝恋心〞

「ネコの恋」として，俳句の季題にもなっている雄ネコのライバル闘争は，実は発情期とも，雌ネコの存在とも関係はない。けれど，発情期になると，ネコたちがみんな自分のホーム・グラウンドを出て，雌ネコのなわ張りへ踏みこんだり，中立地帯をあちこち歩きまわったりするものだから，闘争の機会がふえるだけなのだ。

前にも述べたとおり，闘争の結末は力によって決まるのであって，〝道徳的に決められたなわ張り所有者の優位〞によって決せられるのではない。2匹はかなり長い間，たがいに威嚇しあっている。そして，やがてこのおどしあいで負けたほうが，防御の姿勢をとる。結局は，発情した雌ネコの存在によって，その場所を確保し，相手を追いはらうという傾向が強まっていくだけである。

雌ネコは，自分の求婚者たちの戦いに心を動かされない。2匹の闘争にかかわることなく，その近くにすわりこんで，あたりを見まわしたり，ねころがっていたりする。

おもしろいことに，雌ネコはいつも勝利者に走るわけではない。というのは，敗北者が防御姿勢をとって，じっとそこにとどまっているとき，勝利者は鼻で地



子をくわえて運ぶ親ネコ

面をかぎまわりながら，ちょっとその場を離れるので，雌はそのすきに敗者と手をたずさえて，その場を立ち去ってしまうことができるからである。乙女がしばしば敗北者を愛するのは，人間に限ったことではないようだ。

雄ネコは，発情した雌ネコなら，見境なく交尾しようとするが，雌ネコのほうは，どうもえり好みをしているらしい。場合によっては，特定の1匹の雄ネコに，長年にわたって操をたてることさえある。その雄ネコは，その付近でいちばん強い，他のあらゆる求婚者を締めだしてしまう雄であることもあるが，明らかに雌ネコの好みが，弱い雄に向けられていることもある。どういうわけでこのようなことが起こるのか，まったくわかっていない。

雌ネコの発情期は，6日から10日つづく。雄ネコでは，発情期はずっとはっきりしないが，発情した雌ネコの存在とは無関係な，内因的なものがあることは否定できない。

じゅうぶんに発情したネコどうしが出くわした場合には，〝媚びた逃げ〞そのほかのような予備段階はすべて省略され，直ちに交尾が行なわれる。

〝狩り〞に由来する諸行動

ネコが子を生むときの習慣は，よく知られているとおりである。生んだ子は，すぐになめて羊膜（ようまく）をとりのぞいてやる。育児行動を解発するのは子の動きであって，死んだ子や，弱くてあまり動かない子は，しばしばすぐに食べられてしまう。

巣から落ちたりして，親や兄弟との接触を失った子ネコは，頭をリズミカルに左右に振りながら〝泣く〞。親はこの泣き声で，すぐ緊急事態に気づき，子を捜しだして首すじをくわえ，巣に連れもどす。母親に子を捜す行動を起こさせるのは子の泣き声であって，たとえ巣の外に落ちても声をたてない子には，母親はまったく関心を示さない。そして，子は母親の毛皮にふれると泣きやむ。

このときの首すじをくわえる行動も，狩りの行動に由来するものと考えられるが，交尾行動の場合と同様，激しい咬みつきは抑制されている。その抑制のためには，子が後肢をたれ，全身をだらんとして動かないことが必要であるらしい。

イエネコはこのほかにも，いろいろと興味深い，人によく知られた行動をする。たとえば，自分の排泄物に土をかける行動も，その1つである。

元来，この行動は，肉食獣が自分の存在を消して，獲物を捕えやすくするためのものである。糞の量は多いがあまり臭くはなく，食物は逃げも隠れもしない植物であって，そのため自分の存在を隠す必要もない草食獣は，こういうことをやらない。しかし，そのやり方には，動物の種によっていろいろと流儀があり，イヌは後肢で豪快にパッパッパッと土をかけるが，ネコは前肢，それも片方の肢だけでこまめに処置する。仕上がりは，ネコのほうが完全である。

この行動の解発刺激は，もちろん糞のにおいである。したがって，サラサラした土だと，ネコはかなり長い間，土かけを続ける。土がサラサラで，糞のにおいがいつまでもするからである。ときには

絶滅を防いだ50年の苦闘

アメリカバイソンの悲劇 7

最終回

藤原英司

保護活動の始まり

19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカ社会は，今日の日本の社会情勢とよく似たところがある。すなわち，資本の集中によって大企業がおこり，工業化が著しく，すべてが機械化されるとともに，社会生活の中心が農村から都市へ移り，都市人口の爆発的な増加による都市問題の発生と，機械力による自然環境の急激な破壊が始まった。

このような社会では，物質と生産力がなによりも優先し，人びとは物の獲得と，金銭へのあくなき欲望を充足することに熱中し，自分たちの存立の基盤ともいうべき，自然や生物などのことを真剣に考えているゆとりがなくなる。だが，いつの時代にも，貧者の一燈ともいうべき時代の先覚者はいるものである。アーネスト・ハロルド・ベインズも，まさにそのような人であった。かれは1904年に，ボストン・トランスクリプト紙によって，バイソンを救えという一連のアピール記事を発表した。そしてこの呼びかけは，ついに時の大統領セオドア・ルーズベルトの耳に届いた。

ベインズとホーナデイは，翌1905年にアメリカバイソン協会を設立し，名誉会長にルーズベルト大統領を迎えた。協会は直ちに活動を開始したが，もっともむずかしい問題は，保護すべきバイソンを，どこから調達するかだった。野生のものは，もうほとんど残っていなかったが，西部には牧場に飼われているバイソンがいた。これには，バイソンと牧牛をかけ合わせて，品種改良をはかろうとしたものが多かった。バイソンのたくましい野生の血を導入して，頑健な品種をつくろうとしたのである。バイソンと牧牛の雑種は，キャトル（牧牛）とバッファロー（バイソン）の両方を合わせて，キャタロー（Cattalo）と呼ばれたが，その多くは出産能力がなく，交雑種の特性を再生産することができなかった。

ホーナデイが目をつけたのは，そのようにして個人に飼われていたバイソンだった。なかには交配用でなく，バイソンが絶滅するのを惜しんで飼っていたものもあり，当時全米でおよそ6群が知られていた。

ルーズベルト大統領が，バイソン用の保護地調達のための予算を獲得する一方，ホーナデイも，個人所有のバイソン買収資金1万ドルの調達に奔走した。そして，ホーナデイは集まった資金によって，コンラッドが飼っていた群れのうち，34頭を買い入れた。このコンラッドが飼っていたバイソンには，おもしろい来歴があった。

1874年にパンドレイ・インディアンの〝歩くコヨーテ〞という男が，仲間とともにロッキー山脈の東へ，肉を求めてバイソン狩りに出かけた。そのとき帰りに，群れからはぐれたバイソンの子4頭が，インディアンたちのウマのあとをついてきた。〝歩くコヨーテ〞は，そのバイソンの子を育ててふやしたが，コンラッドが飼っていた群れというのは，その子孫だったのである。

ホーナデイが調達したバイソンの総数

は，寄贈された7頭をふくめて41頭である。結局これが中心になって，モンタナにおけるバイソンの増殖保護が進められた。しかし，そのうちの大部分が，インディアンの手で保護されていたものの末裔だったということは，インディアンとバイソンをともにほろぼそうとした白人にとって，まことに皮肉な結末というべきであった。

〝偉大な魔法使い〟の誕生

1909年10月17日は，ホーナデイにとって記念すべき日となった。この日，前年に設立されたモンタナ州の国立バイソン保護区に，かれが集めたバイソンが放たれたのである。

ホーナデイは，晩秋の丘陵に駆けこんでいくひと握りほどのバイソンを，祈るような気持で見守った。丘の斜面をおおうヒメカモジグサやトボシガラなどの牧草はいずれも枯れはてて，丘のむこうにロッキーの山並みが白雪に輝いていた。インディアンはかつてこのあたりを〝光り輝く山々の土地〟と呼び，大地をうずめるバイソンの大群を追って生活していた。今，ホーナデイの前には，確かに光り輝く山々があった。だが，大地が生命に躍動し，巨大なじゅうたんのように揺れ動く光景は見られなかった。しかし，かれは今，心にほのかな安らぎを覚えた，それは，今，かれが20年に及ぶ苦闘のすえ，死んだ大地に，やっと一滴の生命を注ぎこんだからである。

ホーナデイが蒔いたひと握りの種は，やがて奇跡を生じた。群れの数が着実にふえたこともさることながら，やがてその群れのなかに，純白のバイソンが生まれたのである。白いバイソンは，むかしからインディアンのあいだで珍重され，神の化身と考えられていた。あるシャイアン族の酋長は，戦いにでるとき，必ず白いバイソンの毛皮を身にまとった。記録によれば，1873年にカンザスで，野生の白いバイソンが狩りとられている。また1876年にも，テキサスで1頭がしとめられた。しかし，それ以外に信ずべき記録はない。

モンタナの保護区で生まれた白いバイソンは雄で，〝ビッグ・メディスン〟（偉大な魔法使い）という愛称を与えられ，保護区を訪れる人の人気のまとになった。そして5年後には，この白い父親のもとに，ふたたび白いバイソンが生まれた。

白い野牛の出現によって勢いを得たかのように，バイソンはその後アメリカの各地で，着実に勢いを盛り返していった。今日，ネブラスカ北部のフォート・ニオブララ保護区に約300頭のバイソンがおり，モンタナの群れは325頭になった。また，時期的にはもっとも早く設立された，オクラホマ南西部のウィチタ・マウンテン保護区には1000頭の群れがいる。その他，多くの動物園や国立公園にちらばっているものを集計すると，全米でおよそ2万頭になるとみられている。実際には，これ以上にふやすこともできるのだが，各保護区では，バイソンが一定数を越えると間引いて，生息環境が過度に破壊されるのを防ぐようにしているのである。

バイソンの寿命は，ふつう25年から30年といわれているが，モンタナの〝ビッグ・メディスン〟は，26年生きて1959年8月に死んだ。

バイソンの悲劇に学べ

白い野牛は死んだが，アメリカバイソンは絶滅をまぬがれた。今日，アメリカのバイソン保護区を訪れると，なにもかもきっちり整備されていて，制服の監視員がりっぱな事務所で管理に当たっているのに驚く。それをみて，バイソンを救ったのが，人知の勝利であるとの印象を深める人も多いことだろう。また，誇らしげにそう書いてある書物もアメリカやヨーロッパで見かけた。これはたしかにそういえる面もある。とくにおひざもとのアメリカ人には，そういって誇りたい気持が強いこともわかる。



丘を登るアメリカバイソンの群れ（モンタナ州，国立バイソン保護区）
提供 INTERIOR——Sport Fisheries & Wildlife 撮影 E.P.Haddon

しかし，アメリカ人や日本人という限定された世界からぬけでて，太古から続く自然史のなかでこれを冷静に見つめるとき，われわれは暗い淵をのぞくような思いに襲われる。星の数ほどいたバイソンをそこまで追いつめた神経は，対象こそ変わっても，いまだに今日の人間の内に根強く生き残っているからである。

また，たった1種の動物をこの地上から絶やさないために，文明を誇る人間が50年近く大騒ぎをしなくてはならなかったということも，肝に銘ずる必要があるだろう。

今日の欧米には，少なくとも日本より発達した自然保護思想がみられる。しかしその背景には，バイソンによって代表される，幾多の愚かな失敗の歴史がある。かれらが人類を代表して犯した失敗を，わたしたちは謙虚に批判し，反省しなくてはならない。そして，バイソンを〝自然〟ということばに置き換えてみるとき，100年前のバイソンの悲劇は，にわかに身近なものとして，われわれに迫ってくるのである。■

あまり熱心に土をかける行動を続ける結果，糞をまた掘りおこしてしまうことがある。しかしネコは，もはやそれをもう一度完全に埋めようとはしない。なぜなら，ネコはその行動を，もうじゅうぶん続けたので，この行動をしようとする衝動は，じゅうぶんに満たされてしまったからである。



イヌとネコの糞のしまつ

これはネコばかりでなく，動物の行動に一般的にみられることである。結果が問題なのではなく，行動することそのものが問題なのである。ちょっと考えてみれば，われわれもかなりそれに近いことをやっていることがわかるだろう。

動物における固定観念

本年（1971）6月ごろ，静岡県の御殿場市で，子ネコを育てている母ネコに，ネズミの子を何匹か与えてみたところ，半数は食べられてしまったが，あとの子ネズミは，なんと母ネコの乳房にすがって乳を吸っていた，という新聞記事があった（「朝日新聞」静岡版）。これはたしかにニュースである。

しかし，オオカミに育てられたローマの開祖の話以来，この種の話はたくさんある。動物の行動が〝生得的解発機構〟によるものであって，しかも，その解発刺激が比較的単純なものであることを考えてみれば，ネコがネズミの子を養ったとしても，それほど不思議でないのではなかろうか？

〝ネコはネズミをとるもの〟という既成概念からみれば，これは不思議であるけれども，動物には実はそういう形での既成概念や固定観念はない。あるのは，〝動くもの〟とか，〝黒くないもの〟とかいうような種類の遺伝的〝固定観念〟である。そこにうまくはまれば，一見不思議なことも起こりうるわけである。人間の世界でも同じ種類の不思議なことが，ずいぶんたくさん起こっているのではないだろうか？

とにかく，ネコはネコの論理で生きている。それは人間でいうところの〝かれは論理が違う〟というようなレベルの論理ではなく，からだの構造までふくめた〝種〟の論理なのである。■

（東京農工大学教授）　え　清水　勝

もうひとつの世界

19

グループ・5プラス1

陸生動物の大きさを探る　2

再び恐竜時代は来るか

脊椎(せきつい)動物がもし再び恐竜以上の巨大動物を生みだすとすれば，体重は最高50トン程度で，足は太く短く，胴は球状で太く，首が長い動物になることを前号で推定してみた。このような動物が地上に出現する条件を考える前に，この動物はどんな場所で，どのような生活をするのかを考えてみよう。

このような形で，しかも骨格は体重の2，3倍しかささえられない動物は，当然，敏速な運動はできないから，活発に動く小型の動物を捕食することは不可能である。だから，この動物は植物を主として食べる草食獣か，ときに屍体や行動のにぶい動物を食べる雑食性の動物であろう。現存している肉食獣に巨獣がいないのは，他の動物を捕食するには，敏速に運動する必要があることがその理由の1つであろう。

また，この動物は強度が弱いので，凹凸の激しい地形にはすめないし，敏速性もないから，肉食獣の少ない所でしか生存できない。からだも大きく草食性のこの巨獣は，温和な気候で多湿な，植物の生育によい場所にすむことになるだろう。この動物の形や，必要とする生活条件は，巨大な恐竜の場合とよく似ている。では，このような条件があれば，恐竜や，推測した恐竜以上の巨獣が再び陸上に出現できるのだろうか。

恐竜が出現した地上は，まだ脊椎動物が上陸したばかりで，恐竜が属する爬虫(はちゅう)類以外の強力な動物はいなかった。だから，恐竜は鈍重な草食性の巨大動物になり，肉食性の恐竜もこの巨獣がいたので生存できたのである。恐竜が絶滅したのは地球を襲った氷河期のためで，体温を保つ機構を獲得していた哺乳(ほにゅう)類や鳥類が生き残り，現在の全盛期を迎えている。

今後，恐竜以上の巨獣が再び地上に出現するには，恐竜が巨大化したときと同じ環境があっても，すでに多くの強力なけものが地上にすんでいるのだから，この巨獣は多くの強力なけものとの生存競争に打ち勝たねばならない。この点が恐竜出現の時代とまったく違う状況である。そして，このような環境では爬虫類が今後再び恐竜を生む可能性は残念ながらほとんどない。

爬虫類が，今，全盛の哺乳類との競争に勝って巨大化するには，哺乳類より競争に有利な点が多くなければならない。しかし，哺乳類は脳が発達し，神経の伝達速度も早く，体温を保ち，つねに生理機能をじゅうぶんに発揮させる機構をもつ点など，爬虫類より明らかにすぐれている。

鳥類も哺乳類と同様にこのような機能をもち，空を飛ぶなど哺乳類より運動機能は高い。しかし，空を飛ぶ鳥の大きさは筋肉の力に限界があることが制約になり，物理的に20キロ弱が体重の限度である。それ以上に大きくなれば飛行できなくなり，哺乳類より有利な点はなくなってしまう。また，鳥類も爬虫類も卵生であって，他の動物の攻撃に無抵抗な卵の時代があるが，哺乳類は胎生で幼獣として子どもを生む点も，生存競争に勝てる武器になる。だから，もし今後巨大化する脊椎動物があるとすれば，その動物は他の動物より生存競争に有利な機能をもつ哺乳類から生まれる可能性がもっとも高い。

現在，哺乳類の巨獣としてゾウがあり，マンモスなども生存したのだが，どちらも力学的に可能な限度の大きさよりはるかに小さい。とすれば，今後哺乳類にマンモス以上の巨獣が出現する可能性はあるのだろうか。

哺乳動物が他の動物との生存競争に勝てる武器として，体温を一定に保つ機構があることはすでに述べたが，このことが，哺乳動物の大きさを制限する足かせになることが考えられる。動物が生活するのにエネルギーが必要なのは当然であり，この必要度はほぼ体重に比例すると考えてもよい。

エネルギーを得るには，エネルギー源となる食物を消化吸収し，空気中の酸素で酸化してエネルギーを生産し，そのとき生じた炭酸ガスを放出しなければならない。エネルギー源の吸収は腸の表面積に，酸素吸収，炭酸ガスの放出は肺内の肺胞の表面積に比例する。体長が10倍になったら，その動物は1000倍のエネルギーを必要とするのに，それを生みだす機能は100倍にしかならないことになる。この関係はエネルギー源や，酸素，炭酸ガスを運搬する血管や心臓でも同様である。これらはまったく骨の強度と体重の関係と同じで，動物のからだの大きさを制限する要因になる。



マンモス　氷河時代に北半球にいた巨大なゾウ。全身が，赤褐色の長い毛でおおわれていた

この制限は，哺乳類でも爬虫類でも同じであるが，哺乳類は体温を一定に保つ機構をもつので，爬虫類より多くのエネルギーを必要とする。哺乳類に必要な余分のエネルギーは，その動物の体重と比例するのではなく，ほぼ表面積に比例するので，巨大化の妨げにはならないようにみえる。しかし，爬虫類に必要のないエネルギーを消費するのだから，この制約は哺乳類にとってきびしいものなのである。

この生理的な制約のために，哺乳類は巨獣を生みだすことができても，恐竜より大きくなれる可能性はほとんどない。おそらく3000万年前に出現したバルキテリウムやマンモスが，ほぼ最大の哺乳動物であろう。

恐竜以後，脊椎動物で巨獣を生みだせるのは哺乳類なのだが，残念ながら哺乳類は爬虫類以上の巨体には，なれそうにない。それでは，四肢（しし）でからだをささえる脊椎動物と異なった構造をもつ動物は，恐竜以上の巨体になる可能性はあるのだろうか。■　（G）

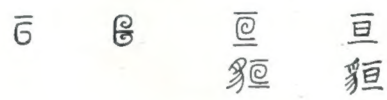
え　清水　勝



恐竜　中生代に栄えた爬虫類で，巨大なものが多い。草食性と肉食性とがあった

漢字のふるさと　19

藤堂明保



貆（あなぐま）　日本ではカンと読み，中国では huan と発音する。イタチ科に属するけれども，土地によっては，貍（タヌキ）や貉（むじな）と混同している。発音音符を雚にとりかえて，貛と書くこともある。

「亘」という字は，上下に横線をえがき，その間に丸いうずまきをそえた字である。上下の線で囲まれたスペースを，丸くとりまいているのである。もし，ぐるりと木を植えてとりまけば，桓になる。亘—垣—桓などは，すべて丸い，丸くとりまく，という意味を含むことばであった。

では，アナグマをなぜ「貆」というのだろう。その左がわは，けものを表わす記号であるから問題はない。右がわにそえた「亘」をもって，カンと発音するのは，明らかにアナグマが体をまるめ，まるでうずまきのような形をして，うずくまるからであろう。だいたい，漢語のカン（クワン）ということばは，様々な漢字で書かれるけれども，すべて「丸くとりまく」という意味である。たとえば，環（丸い輪）や完（欠けめなくとりまく）のように。

イヌにせよネコにせよ，小動物が休むときには，たいてい体を丸くまくものだ。ただアナグマは，穴の中にこもるのが習性であって，とくに体を丸める引っこみ思案の風態が目立ちやすい。そこで，これをカンと呼んだのである。■



シマスカンク。イタチ科。
この動物は足もおそいし，木登りもできない。
しかし，肛門腺から噴射する強烈な悪臭で
敵を撃退できるから，こわいものなしだ。
1産4，5子で，春に出産する。

PH. A. VISAGE-JACANA

シマスカンク属 *Mephitis*

シマスカンク *Mephitis mephitis*

シマスカンクは，カナダ南部とアメリカ合衆国の北部全体にかけてすんでいる。からだつきはほっそりとしていて，体長は40センチくらい。尾は黒くつやのある毛がふさふさとして，体長と同じ長さである。

からだの上には，2本の帯状の，白っぽい縞があって，額から出て首すじのところで2本に分かれ，また尾の上でひとつになっている。しかし，すべてがこういう模様になっているわけではなく，ときには，1腹に，からだ全体が黒いもの，全身が白いもの，縞のはいったものなどが，混じって生まれることがある。

頭は非常にとがっていて，からだにくらべて小さく見える。上下のあごには，34本の歯がある。鼻の先には毛がなく，ふくらんでいる。四肢（しし）は短く，その先にある5本の指には，長いつめがついている。

イタチ科に特有の尻袋（しりぶくろ）は，《肛門腺（こうもんせん）》と呼ばれていて，スカンクではとくに大きい。この袋は，ハトの卵ほどの大きさで肛門の両側にあり，油性の，黄色くて悪臭のある液体の分泌（ぶんぴ）物を出す。敵に襲われたりすると，その分泌物を，特別な筋肉を収縮させて1メートル以上も噴射する。

スカンクは，うっそうと茂った森林よりも，むしろ草原とか，木のまばらな森に好んですんでいる。夜行性で，昼の間は木のはらとか岩のあいだ，地面に掘った穴などの中で眠って過ごす。土を掘るのがじょうずな動物で，地中の穴のすまいには，たっぷりと木の葉が敷きつめてある。

スカンクは，実際には冬眠しない。それは，冬に，巣穴のまわりの雪の上に，よくこの動物の足跡がみられることでわかる。冬が近づくと，非常に太ってくるが，活動力のほうはたいへん衰える。スカンクは巣にこもりがちな動物で，外に出ても跳躍したり，ものによじ登ることはしない。ふつう，小さくはねて移動する。ときには蹠行（しょこう）といい，足のうらを全部地面につけて歩き，そのときは背中を丸め，尾を下げて，小さくはねながら前進する。

スカンクは，夜，土を掘って土中の小動物を捕え，また昆虫（こんちゅう），両生類，小さい哺乳（ほにゅう）類なども食糧としている。その他，水けの多いくだものや木の根も食べている。

この動物は，身の危険を感じると相手が人間であれ，あるいは肉食動物であれ，かまわず威嚇するような態度に出る。まずはじめは，地面に足踏みしながら立ち向かっていく。それでも敵がしりごみをしないとなると，こんどはくるりと向きを変えて，そのはなやかなまだら入りの尾を上げて敵に後ろを見せ，威嚇する。マダラスカンク *Spilogale putorius*〔アメリカ大陸に分布し，フロリダとメキシコ北部にすむ〕の場合は，尻を上げて前足で歩きもする。

そして，それでもなお敵が近づこうものなら，自分の身を守るただひとつの方法，実に強力な効果のある最後の手段をとる。つまり，悪臭のある分泌物を，敵に噴射する。

そのにおいは，吐きけをもよおさせるほどいやなもので，人もけものも逃げださずにはいられない。臭気が強烈で，それがかかった服は捨ててしまわなくてはならないほどだし，スカンクをひき殺した車は，いくら洗っても，何週間もにおいがぬけないほどである。この動物は自分の臭気の効果を，確信しているので，人を恐れることもない。だから，どこかの家の戸口があいていたりすると，ためらいもなくはいっていく。

これらスカンク類は一夫多妻である。冬には何匹かの雌が，同じ1匹の雄の穴にいっしょにすむ。交尾期は春のはじめのころで，63日の妊娠（にんしん）期間のあとで，雌は1度に4，5匹の子を生み，6，7週間は授乳する。そして，親子は8月ころになると，ちりぢりになっていく。スカンクの寿命は約10年である。

その毛皮は，非常に需要が多い。最近では，毛皮から完全にスカンクのにおいを取りのぞく方法があるのだが，それでもなおハンターは，毛皮に傷をつけないようにするだけではなく，この動物に，いやな分泌物を噴射する余裕を与えないで，できるだけすばやく殺すように気を配っている。

スカンクのいるところは，その体臭と，スカンクが怪しい物音におびえて，巣穴の土をたたく騒ぎとか，寝床をつくるのに使った木の葉が，その穴の入り口のあたりに，散らばったままになっていることなどでわかる。

つかまると，容易に人になれはするが，そのかなり荒っぽい気性はなくならない。おこらせないように気をつければ，悪臭のある分泌物を噴出する心配はまずない。北アメリカでは手術によってスカンクの肛門腺（こうも



シマスカンク。イタチ科。
後頭部から尾にかけての2本の白いすじ
鼻づらの白い線がひときわあざやかである。
体長約40センチで，尾長もほぼ同じ。
カナダ南部とアメリカ合衆国の北部にすむ。
PH. R. LIGHTFOOT



マダラスカンク。イタチ科。
シマスカンクよりは小さく
白い毛がまだらになっているのが特徴。
アメリカのフロリダとメキシコ北部に分布。
スカンク類は，穴を掘ってその中にすんでいる。
PH. F. LANE

んせん）を取り去り，ペットとして飼育している。

飼育下でのこの動物の好きなねぐらは，よく乾燥した草や木の葉の上で，丸くなって眠る。非常にきれい好きで，食事のあとは必ず鼻面をていねいにふき，また敷きわらをよごさないように注意するくらいである。

マレーアナグマ属　*Midaus*

マレーアナグマ
Midaus javanensis

マレーアナグマ，またの名テラゴンは，ヨーロッパアナグマと非常に似ており，歩き方は蹠行（しょこう）性で尾は短い。臼歯（きゅうし）はあまり鋭くないが，これは雑食生活のしるしである。とがった鼻面，毛に埋もれたような耳，よく発達した前足のつめなどが，それを証明している。

歯数はふつう38本で，幼時に４本の小臼歯が抜けおちるから，生涯の大部分は34本である。体長は約40センチ，尾は５センチくらい。

からだはたくましく，足は強力で短い。大腸の端に，悪臭のある分泌（ぶんぴ）物をためている肛門腺（こうもんせん）があって，特別な筋肉を働かせ，60センチぐらいまでとばすことができる。このため《アジアのスカンク》とか,《臭いアナグマ》と呼ばれている。

長くて密生した毛は濃い茶色で，背中に短く白っぽい線があり，それは尾の先までのびている。からだの下の部分は，明るい色をしている。被毛は二重になっており，下は絹のように柔らかい下毛でおおわれているが，上毛はかたくさか立った毛で，もっと濃い色のたてがみのような毛が，わき腹と首すじについている。

マレーアナグマは，スンダ列島の森や平原，高地などにすみ，夜行性である。ねぐらは，木の根で守られた場所に掘った，直径１メートルの部屋だが，その部屋までは約２メートルくらいのトンネルを通っていく。そこでこの動物は昼を過ごし，夜，暗くなってからそこを出て，おもな食糧としている昆虫（こんちゅう）の幼虫や，地中の小動物を捜し始めるのである。とくに，肥沃な土地にたくさんいるミミズをよく食べる。それをブタのように，足と鼻面で地面を探って見つける。

スカンクと同じく，マレーアナグマも，自然にそなわっている防御力を絶対に信頼している。自分は不死身だとでも思っているのか，なにものも恐れない。けんか好きではなく，容易に人になれる。マレーアナグマは，１度に３，４匹の子を生む。





アナグマ属 *Meles*

アナグマ　*Meles meles*

アナグマを見ると、ずんぐりとした、どちらかといえば、ぶかっこうな印象を受ける。蹠行（しょこう）性で雑食、おまけにのっそりと歩くところは子グマに似ている。だが38本の歯と臭腺（しゅうせん）をもっているところは、まぎれもなくイタチ科の動物である。

全長は20センチの尾をふくめて100センチに及び、体重は15キロに達する。肩までの高さは30センチくらいである。首は太くて、頭部は三角形をしているが、頭蓋（ずがい）は扁平である。目と耳は小さい。かたいつめは、ネコのようには引っこめることができない。足は短く、尾は断ち切られたようになっていて、毛がふさふさとはえている。肛門腺（こうもんせん）は、肛門と尾のつけ根との間にある。その外へ開いた裂けめからは、ハイエナのものによく似た、臭気のある濃い分泌（ぶんぴ）物を出す。

毛は長く、さか立っている。その色合いははっきりしないが、それは上毛の1本1本に、3つの色が混ざりあっているからである。つまり、いちばん根もとは薄紫、まん中あたりは黒、毛先は灰色である。白い頭には、2本の黒いすじが通っていて、耳の上から首すじまでのびている。のども同じように黒い。

雌は雄より小さく、毛の色は薄い。子は、いくらか灰色の毛が混ざった、白い毛に包まれて生まれる。だが頭にあるすじの模様は、すでにはっきりと出ている。

アナグマの生息地域は、コルシカ島、サルジニア島、シシリー島、およびスカンジナビア北部をのぞいたヨーロッパ全体と、中央アジアから日本までの大部分に及んでいる。

用心深い穴居生活者

アナグマは穴の中にすんでいる。その穴は強いつめで掘るのだが、人家からそれほど遠くない、よく日のあたる木立ちに囲まれた丘の中腹にある。

それはキツネの穴より複雑にできていて、150センチ、あるいはそれ以上の深さにある中央の広い1つの部屋が、6つから7つものトンネルで他の部屋や外部に通じ、出口はそれぞれたいへん離れたところについている。

中央の部屋には、乾燥した草やコケでつくられたここちよい寝床があって、掃除がよくゆきとどいている。なにごともなければ、アナグマは穴にはいるにも穴から出るにも、いつも同じトンネルを使う。したがって、他のトンネルは緊急のときだけに役だつのだ。

これらのトンネルは8～10メートルの長さがあり、しばしば垂直の通風口がついている。穴は年を経るにしたがって、代々のすみ主によって完璧なものにされる。ひどく古くなると、トンネルは網の目のように複雑になり、外来者にはそこから、とうてい抜けだすことができそうにもないほどである。

アナグマは、多くの場合、生涯の大部分をこの穴の中で、他のアナグマといっしょに過ごす。キツネやアナウサギさえも、いっしょにすまわせてもらうことがあるほどだが、その場合、屋敷の主人に中央の部屋をとっておいて、



アナグマ（イタチ科）。アナグマ（[illegible]）という名は その[illegible]性と、か[illegible]で[illegible]をゆすって[illegible]く[illegible] それに、つめが引っこまないことなどの特徴から [illegible]にひそむ熊に見たてられたのだろう。体長は約80センチ、尾長は20センチほど。（左）
PH. F[illegible]

アナグマの分布地域。
[illegible]の温帯域に分布し、[illegible] 日本では、[illegible]、四国、九州に生息する。地方によっては、タヌキと思われ [illegible]の名がいっしょに混同されている。





かれらは地面に近い部屋で満足する。

アナグマは，日暮れになると，注意深いようすで外に出る。いきなり外にとびだすのではなく，キツネがやるように鼻面をちょっとのぞかせてみて，またそれを引っこめ，次に頭を出して周囲のようすをうかがう。そして，少しも危険がないと確信したあとでなければ，出ていこうとはしない。これとは反対に穴に帰るときは，秋の終わりころの，からだがふとっているときをのぞいては，いつも非常に敏捷で大胆である。

行動範囲は穴の周辺に限られていて，それぞれの場所にいく目的も，非常にはっきりしている。たとえば，日光浴のための特別の場所があり，また別に遊びのための場所があり，さらに排泄のための場所がある，といったぐあいである。

自分のからだも，巣穴も，清潔にするのが好きで，外部寄生虫のダニやノミなどを追い払うために，泥土をかぶる。いわゆる砂浴びの習慣がある。

アナグマの食糧の十分の十ぐらいは，地中の小動物である。夏の間，オタマジャクシやカエルなどが豊富なときは，地中動物をそれほど食べない。5，6月には，野鳥の卵を食べて舌つづみを打つ。またハチの巣をうちひっかいて蜜をさぐり，幼虫を食べる。ハチに襲われても平気だが，それはアナグマが，あらい毛と，分厚い皮，そして皮下脂肪をもっているので，ハチの針を完全に防ぐことができるからである。

秋には地面に落ちた木の実，菜園で土から掘りだしたニンジンやカブ，野ネズミやモグラのような小さい哺乳類，はにゅう類を食べる。トカゲやヘビも食い，マムシの毒にも免疫になっているので，マムシさえも平気で襲って食べる。

かれはまたブドウ園にはいりこんで，ブドウのふさを木から落とそうと，幹をゆすったり，好きな燕麦を食べに，穀物畑にも出かけていく。たまにはウサギの子とか，歩いているキジのひなをとらえたり，地上の巣を冒険をおかしたり，野鳥の巣を荒らしたりもする。

秋の終わりには，アナグマはたいてい丸まるとしてくる。そうなると，ふかふかした寝床が準備されている穴の中に引きこもり，そこで丸くなって冬眠を始める。クマの冬眠のようにアナグマの冬眠も，よく中断される。天気のよいときには目をさまし，水を飲みに穴から出かけるのである。アナグマは冬眠の間に，それまでにたくわえた脂肪分を使いはたしてしまう。そのため，春に穴から出てくるときには，すっかりやせ細っている。

家族水入らずの生活

雄と雌は別々に巣穴をつくるが，ときには同じ穴で暮らしている。そして8，9月に交尾し，そのときはまだ前年に生まれた子どもたちが，いっしょにすんでいる。

妊娠……の期間を定める……







かしい。というのは，ノロジカでもそうだが，受精卵の子宮粘膜（しきゅうねんまく）への着床が，容易ではないためである（注1）。胎児は受胎してから数か月たって，やっと大きくなり始め，2月から4月の間に出産する。1度に3匹から5匹の子が生まれる。母親は，1か月間授乳する。子は1週間で目が見え，1か月後にはノウサギほどの大きさになる。

雌は，子どもたちが自分でえさを見つけるようになるまで，地中動物や木の根，小さい哺乳（ほにゅう）動物などを運んできて与える。子どもたちは，10月のはじめに親のすみかを離れるが，しばしば近くの穴にやってくる。

アナグマはほぼ2歳で成熟する。寿命は，12年から15年である。

人間からみると，アナグマを殺すのに，かつてはたくさんの理由があった。その毛皮は上質と思われていて，また厚い皮にも多くの用途があった。尾の毛は，ひげそり用のブラシに使われていたし，脂肪は薬品や燃料になった。現在では，このような用途の大部分がなくなってしまったにもかかわらず，作物や菜園に与える損害，コガネムシの幼虫を掘りおこすときに植物の根をいためるなどの被害を防ぐために，人間はアナグマをだんだんとほろぼしつつある。

今では穴から追いだすのに，毒ガスまでも使っている。またアナグマが夜の探索を終えて，明けがたに帰ってくるのを巣の前で待ち

アナグマ（イタチ科）。鼻筋と目の黒い模様が特徴的。
雑食性で，木の実，野菜，あるいは
地中の小動物を食べている。夜になると
地中深くのトンネルから出てくる（上下2枚）
PH. CHEVALLIER/IMAGES ET TEXTES
PH. J.C. CHANTELAT

シマスカンク（イタチ科）。
スカンク類が，その必殺の武器を使うときには
敵に向かってさかだちをし，尻を向け
猛烈な悪臭のする分泌物を噴射する。
これで逃げださないものはまずいまい。
PH. VISAGE/JACANA

ラーテル（イタチ科）。
キバをあらわすこの顔は，柔和そのものだが，
身を守るときには激しい気性を示す。
老練なアナグマでは，訓練されていないイヌなどは
問題にしないほど強いという（24－10，11）
PH. [illegible]











伏せして，狩ったりもする。

アナグマは，イヌに見つけられるとうつ伏せになり，つめで身を守る。穴の中で襲われると，恐ろしい顔をし，きばで身を守る。

成熟したアナグマは，つかまえてもならすことはできないが，小さいときならば完全なペットになって主人のあとについていくことや，呼ばれるとそれに答えることなどを覚える。

撲殺されたあるアナグマ

ある期間，雌のアナグマを訓練したナチュラリストは，次のように語っている。

われわれがガスパールと呼んでいた雌のアナグマは，こしらえてやった小屋の下に，穴を掘った。このアナグマは，排泄物を埋めようとして絶えず新しい穴を掘り，それにていねいに土をかけるのだった。

わたしが食事をしているときは，とても喜んでわたしのそばにいる。小さい肉片をもらおうとして，あと足で立ちあがり，また，〈ウ・ギュ・ギュ・ギュ〉という声を出しながら，わたしのひざの上に，大きい足と，つやつやしたきれいな顔をのせるのだった。冬の間は暖炉の前で，うずくまって寝ていた。

10月の終わりごろ，走るのが苦しいほどに太ってきた。なんでも食べるが，とくにリンゴは好物で，種子までもいっしょにのみこんでしまうのだった。

秋のある朝，かわいそうに，わたしのガスパールは死んだ。夜，かれはいつものように，近くの菜園のカブを掘りに出かけていった。朝早く，静かに家に帰ろうとしていたとき，農夫たちに見つかったのだ。かれらはイノシシとまちがえて，アナグマの必死の抵抗を無視して，ひどいことにくわでたたき殺したのである。

アメリカアナグマ *Taxidea taxus*，別名ナルカシーウは，形態，習性ともにアナグマに似ているが，たぐいまれな力持ちである点が異なっている。

アフリカラテル（イタチ科）
すごい顔のつらがまえ，あいきょうのある顔たちは伝説上の動物，河童を思わせる
しかし，このラテルの生活の場は水中ではなく，おかである（左）
PH. LISAGE/JACANA

アメリカアナグマ（イタチ科）数頭のアナグマが死んだ仲間を埋葬し，頭を上下に動かして儀式めいた行動をしたという観察例がある
動物学者はこの行動を，アナグマの巣穴をかたづけきれいにする本能の働きだとしている（上）
PH. G. J. WOODS/NHP AGENCY



アナグマの子 1腹3～5子で，出産は2～4月
きまった巣穴の中で，家族で生活し
秋には巣立ち，2年ほどで成獣になる
子ども時代は，おたがいに仲良くじゃれあい，相手の背をとびっこして遊ぶ（下）
PH. HEMPEL/RAUS





ラテル属　*Mellivora*

アフリカラテル
Mellivora capensis

ラテル属には2種類があって、アフリカラテルは南アフリカにすんでいる。また**インドラテル** *Mellivora indica* は、以前はアラビアのあたりにまで見られたが、今ではトルクメンのふもとと、インド北部、それにネパールにしか見られない。

アフリカラテルはアナグマと同じで、ずんぐりして、がっしりとした姿をしている。非常に短い尾をふくめて、全長は90センチほどある。32本の歯と、ほとんど見えないくらいの小さい耳がある。足はがんじょうで短く、強力なつめをもっている。とくに前足のつめは、土を掘るのにつごうよく強力にできている。

毛はかたくて弾力性がある。頭の上と、背の部分は灰白色で、その他の部分は、ほとんど黒に近い褐色である。この2色の間に、淡い色のすじがある。

アフリカラテルは夜行性の動物で、昼の間はずっと、穴の中で暮らしている。穴を掘るのは驚くほど早く、威勢がよい。夜になると、小さい哺乳(ほにゅう)類、とくに齧歯類、野鳥、爬虫(はちゅう)類、地中の中小動物などを求めて、草原をさまよう。この動物はまた木に登るのもうまく、木の実も食べ、とくに蜂蜜が大好きである。

おたがいに違った種の動物たちが、一致協力して食物のありかを捜したり、それをたべたりすることは、動物の世界ではめずらしいことではないのだが、アフリカラテルの場合、そのもっとも典型的なすばらしい例を示してくれる。

まず、ミツオシエ *Indicator indicator* という鳥が、空洞のできた木の幹で野生のハチの巣を見つける。鳥は騒ぎ、騒ぎたてて、アフリカラテルの注意を引き、巣があることを知らせる。すると、アフリカラテルが巣をこわしにやってくるのだ。もちろんハチたちは懸命に抵抗するのだが、この動物の毛は非常に密生しているうえ、皮下脂肪が非常に厚いので効果はない。アフリカラテルが蜂蜜を食べつくすと、そのあとで残りをあさるのが役目で、ミツオシエは残りにありつくのだ。このラテルを別名、ミツアナグマといい、属名がハチミツをむさぼり食うという意味なのは、こうした事実からきている。

アフリカラテルは、ときにはかなり大きい哺乳(ほにゅう)類、とくにウシなどを攻撃することもあるといわれている。まず最初、頭部の軟骨のような部分を食べ、それから内臓を平らげる。

雌の妊娠(にんしん)期間は6か月ぐらい、ふつうは、1産2子である。寿命は、飼育下で24年も生きた例がある。

アフリカラテルは、肉食動物なみに強いうえ、身をかわして難をのがれるにはあまりにも動作が鈍い。それにまたかれの性格が、逃げることを恥とする。

この動物の怒りは長く続かないが、とにかく、世界でいちばんおこりっぽい動物の仲間に入る。アフリカラテルはまず、他の多くのイタチ科動物と同じように、肛門腺(こうもんせん)から悪臭のある分泌(ぶんぴつ)物を噴射して、敵の意気をくじこうとする。それでも効果がないようなときは、地中に逃げこもうとする。そのひまがないと、ふだんつめという恐ろしい武器で、勇敢に力強く身を守るのである。また首のあたりの皮膚は、非常にダブついているので、敵が首すじにかみついても打撃を受けず、逆に振りはなして、その敵をかむのである。

[illegible]

PH. F. MERLET / ATLAS PHOTO

[illegible]

PH. DES BARTLETT / DENIS PRODUCTIONS



24 · 16

[illegible]なかま
[illegible]性の動物で、夜になると
森林のなかをうろつき、小さな哺乳動物や野鳥
や昆虫、地中の小動物などを食べている
[illegible]である。

[illegible]



クズリ属　*Gulo*

クズリ　*Gulo gulo*

クズリはイタチ科のなかでは、もっとも大きくて、強い動物である。

体長は約90センチ、尾長は40センチである。肩までの高さは40センチ、体重は約20キロ。歯は非常に強くて、38本。背は弓形に曲がっていて、頭は丸く、口先が平たい。脚はイタチ科としては長いほうで、強いつめのある、厚ぼったい足先がついている。毛がふさふさとはえた尾を別とすれば、見たところクマに似ている。

びっしりとはえた下毛の上に、長くてかたい上毛がある。この体毛は、水をはじくという特性がある。もっとも寒さのきびしいときでも、氷片が毛皮の表面につくことはないし、汗もそこにはたまらない。ふつう毛色は、黒みがかった褐色である。2本の薄紫の縞が肩から出て、わき腹を通って尾のつけ根までつながっている。額、ほお、のど、胸などは、灰色がかっている。

クズリは、年に2度毛がはえかわる。夏のはじめには、頭から尾にかけて順番に、毛が束になってぬける。逆に冬が近くなると、ふさふさした毛が、まずからだの下の部分から、次いで頭のほうへと、はえ変わる。

クズリは極北地帯のどの森林にもいる。オオヤマネコ、ビーバー、トナカイのような北にすむほかの動物と同じように、クズリの分布地域も、北緯50度以北の北極を中心としたドーナツ状になっている。

獰猛な食いしん坊

クズリの食欲は猛烈なので、どの国でも、どの言語でも似たような名まえをつけられている〔学名の*gulo*はラテン語で食道、フランス名gloutonは食いしん坊の意〕。和名のクズリというのは、オロッコ、ギリヤーク族のことばからきている。

ひっそりとした山岳地帯の岩の裂けめとか、何もすんでいないほら穴とか、密生したやぶなどにすんでいる。冬のどんなに寒いときでも、冬眠はしない。

クズリは、見つけた食物はなんでも、むさぼるように食べる。エスキモーたちが日に干す動物の皮の切れ端までも食べる。かれのおもな獲物は齧歯（げっし）類、とくにネズミである。また、おあまりをちょうだいしようとして、オオカミやキツネのあとをついていくこともある。必要となれば、自分より大きいトナカイやヘラジカのような動物にも、ためらうことなくいどみかかる。

木登りが得意で、枝の上で待ち伏せ、獲物の背にとびかかる。冬には、猟師たちがあちこちに仕掛けたわなをめぐり歩いて、そこに仕掛けられた肉片や小動物を、うまく抜きとって食べる。そのために猟師はみんな、この動物を憎む。

クズリは、小さい獲物は皮ごとのみこみ、大きいものは次の食事のときまで、地中に埋めておく。また腐った肉でも食べる。サモイェード人〔北西シベリア、ノバヤゼムリャ、その他の諸島にすむ民族で、トナカイを飼育して生活している〕は、クズリが人間の死骸さえ掘りおこして食べるといっている。ラップランド人〔ノルウェー、スウェーデン、フィンランドにまたがる地域にすんでいる民族〕やカナダインディアンは、クズリを悪魔の使いのように思っている。

クズリ（イタチ科）。
獰猛なうえに、たいへんな食欲の持ち主。
極地にすむオオカミやイヌも
この動物にはかぶとをぬぐそうな



クズリはからだは小さいが、オオカミやクマもふくめて、北極地方のすべての動物が降参する、恐ろしい相手である。

クズリの歩きぶりは、たいへん特徴がある。頭を下げ、背を丸めて、とびはねながら前進するのである。よくとんぼ返りをするが、そのためにおそくなるようなことはない。一種のギャロップで歩き、あと足が前足の足跡をもう一度踏む。

いちばん発達している感覚は嗅覚（きゅうかく）で、岩や木の幹に、尻を振って肛門腺（こうもんせん）の分泌（ぶんぴ）物をなすりつけ、自分の土地だというしるしをつけておく。同じ場所に尿をかけて、いっそうその場所を確かなものにしておくこともある。雄は広いなわ張りに、2、3匹の雌といっしょにすんでいるが、雌たちもその場所を、尿や肛門腺の分泌物のにおいのおかげでちゃんと覚えている。

交尾期は秋から冬。アナグマと同じように、排卵（はいらん）の時期や、子宮内壁への受精卵の着床がさまざまなためはっきりした妊娠（にんしん）期間を決めるのはむずかしいが、それはほぼ60日くらいである。1産に2、3子、まれには4子を生む。雌は5月に、岩の割れめとか、密林の奥深くに掘った穴などの、暖かくて柔らかい寝床の上で、お産をする。

クズリは、むかしはとくに毛皮をとるために捕えられた。カムチャッカの住民たちは、その毛皮が、もっとも美しく貴重なものだと考えていた。男が、妻や婚約者に贈る最高の贈り物は、彼女たちが耳を寒さから防ぐのに頭につける、人の手ほどの大きさの2枚のクズリの毛皮であった。

むかしロシアでは、もっとも高貴な階級のものだけが、クズリの毛皮を身につけていたが、それを身につけるものは、人からねたまれてもしかたがないといわれていたほど珍重されていた。

クズリの飼育記

雌は子どもたちを実にうまく隠しているので、めったに見つけられないが、捕えた子どもは容易にならすことができる。小さい間は子グマのように、のどを鳴らしながら大きな頭を振り、眠るとき以外は、ゴソゴソと動きまわることをやめない。仲間といっしょにいるときは、クズリの性格がじゅうぶんに表われる。かれらは1日じゅう遊び、けんかをし、とびはねて過ごす。



クズリ　イタチ科。
木登りがとてもじょうずで、
木に登っては、いつも獲物を物色している。
ユーラシア、アメリカの極北地の森にすむ。
体長は約90センチ、尾長は40センチほど（上）
PH. HOLMES LEBEL

クズリは一見したところ、おとなしい感じにだまされるが、非常に血気さかんで、
天性のけんか好きである。
その鋭いつめと強力なパンチで
相手の動物をたたきふせてしまう（下）
PH. HEMPEL-RAPHO



フィンランドのある動物学者が、幼いクズリを捕えて、妻や子どもたちの友として、自分の家で育てようと思いたった。飼育者や猟師に災いをもたらす悪魔のような生きものと思われて、その実体はほとんど知られていないこの動物の生態や知能を、もう少しよく理解しようとしたのである。

この動物学者は、母親のほら穴の中にいた、2匹のクズリの赤ん坊を首尾よく捕えてきて、しんぼう強く熱心に観察した。

その結果、まずわかったことは、これらの幼いクズリも、他のすべての動物の子と同じように、こまやかな愛情や暖かいねぐらなどが必要であるということだった。

食べ物にはとくに敏感で、哺乳瓶で与えられる乳の質の変化によっては下痢や便秘を起こして、苦しみを訴えるのであった。

そのため、腸の機能を整えるために、よく肛門（こうもん）をマッサージをしてやったり、ぬらしてやったりして排便を促してやらねばならなかった。これは、野生では母親が絶えずしてやっていることである。

やがてこの幼いクズリにも、細かく刻んだ牛肉が食べられるような時期になった。もし野生の生活であれば、母親が生の肉を腹いっぱい食べて、それを子どもの口にもどして食べさせるのだが、いかに熱心なこの動物学者も、一度食べたものをもどすことまでは真似できない。しかし、生の肉片をよくかんで、唾液（だえき）の混じったものを与えることにより、どうにかこの時期を脱したのである。

この動物学者とその家族は、希望と絶望、喜びと悲しみを交互に繰り返しながら、2匹のクズリを大きく育てあげることに成功したのである。

しかし、フィンランドの農民たちは、ラップランド人と同じようにこの動物に対して敵意をもち、クズリにかかわりをもつのは自然に反する行為であり、罪悪だと非難した。しかしこのクズリは、飼い主に対しては愛情を示し忠実であった。ときに逃げだすことがあっても、いつももどってきて、自分のうれしい気持を表わすのだった。

主人はこのクズリたちを、いっしょに連れて歩き、かれらが泳いだり、木によじ登った

左：
クズリの食欲は、驚くほどである。
動くものすべてがごちそうに見えるらしい。
高い木の上で、獲物をねらっている
いちばん発達している感覚は嗅覚である
PHILIP CARINTHIONI



り、気違いのように、からだをぶっつけあったり、興奮するたびにふさふさとした尾をぐるぐる動かしては、雪のなかをころげまわるのを観察した。しかし食事のときは、生肉を竿の先につけてやるという用心も、欠かさなかった。というのは、少しも悪意がなく、また襲いかかる気持がなくても、食べ物をパクリとやるときに、つい人の指を食いちぎってしまうからだ。それほどかれらの食欲はおう盛で、歯が鋭いのだ。

これらのクズリは、常に新鮮ではあるが、すでに死んでしまった動物の肉を与えられてきたため、自分で獲物を殺す方法を知らなかった。だからはじめてヒツジの前に出たとき、この見たこともない動物が、その厚い毛の下に豊富な肉を宿していることがわかるのに、長い間かかった。

このことからクズリも、他の野獣のように、自然界で獲物を殺すことができるようになるには、親たちの教えを必要とするように思われる。

この動物学者は、クズリたちをまったく自由にさせ、スキーであとをつけていって、その習性を知ろうとした。この動物はすぐれた嗅覚（きゅうかく）をもっているが、視力は悪く、遠くを見るには、人間が日のまぶしいときにするように、前足をかざすようにするのだった。

獲物を追いかけることを覚えてから、このクズリは、教えられないのに、獲物の残りをあとで食べるために隠した。しかし隠しておいたものを、あとで見つけられるとはかぎらなかった。というのは、クズリどうしで、あのきわだったにおいをたよりにして、とっておいたものをよくおたがいにとりっこするからだった。

クズリの毛はふつう濃い褐色で、なかにはまっ黒のものもおり、1年に2度換毛する。1産2、3子で、出産は5月ごろである。注意深く木をおりているかれはいま獲物を見つけたのだろうか。

PHILIP FURNHOUSE

日本のイタチ科動物　3

毛皮獣について
──ミンクを中心に

犬飼哲夫

毛皮は人類最古の衣服であった。そして今も婦人の装飾用として，あるいは極地の民族の防寒用としてさかんに用いられている。とくに前者の場合は，ひとつの産業として，国際的市場が形成され，多くの需要をさばいている。

毛皮のために捕獲されている動物は，ウサギ，リス，ヒョウ，オセロット，ラッコ，オットセイ，キツネなどだが，なんといってもその代表は，ミンクだといえる。

オークションが流行と価格のかなめ

毛皮の流行やその価格決定は，他の商品と異なり，国際的なオークション（競売）によっている。現在，その代表的なものとしては，ニューヨーク，ロンドン，コペンハーゲン，レニングラードの各都市にある。ここでは生産者から集めた毛皮を，世界各国から参加したバイヤーが競売によってせり落とす。かれらは，その時代の流行と製品の売れゆきを予想して価格をつける。この値段が標準になって世界じゅうの毛皮の流行と価格が決定されるのである。

国際的なオークションに提出されるような毛皮は，普及性のあるものだが，たとえ，どんな珍しい毛皮がオークションに出品されても，売買の対象にならなければ（つまり，バイヤーが，その価値を認めなければ）どこでも通用するような商品的価値があるとはいえない。

一方，これらに対して，極地や寒冷地の防寒用として用いられる毛皮―実用毛皮は，もちろん流行もなく，オークションにかけられることもない。また，文明社会の人びとが喜ぶ，リスのような毛皮は，寒冷地の人びとにとっては，防寒力も耐久力も劣るから，価値がない。むしろ，実際的な役にたつイヌの毛皮のほうをかぶっている。

このほか，民族によっては，特殊な伝統的価値をもつ毛皮があって，その民族のあいだで，（他民族から見れば）異常なほど，求められていることがある。たとえば，中国におけるトラの毛皮，日本におけるクマの毛皮などがそうで，クマの場合，日本では国際価格（5万円）の約2倍で取引きされている。

寒冷地中心のミンク飼育

さて，毛皮獣の代表として，日本でもさかんに飼育されている，ミンクを中心に，その実態を見てみよう。

ミンク（この文章中ではすべて，アメリカミンク *Mustela vison* をいう）の毛皮は，約100年前に，野生のものを捕えて人工飼育に成功してからは，いわゆる養殖ミンクのものにかわっている。

ミンクの養殖が盛大に行なわれるようになったのは，1931年以降のことである。その動機は黒褐色のミンクから，毛色が非常に変わった，いわゆる突然変異が出て，それが品種として固定されたことからはじまる。

今では銀灰色のサファイアとか，まっ黒なダーク，褐色のパステルなど10数種の色合いをもつものが選ばれている。新しい流行をつくるために，毎年新しい品種がくふうされているが，そのなかには，2,3年で飼育が下火になり商業ベースからはずれてしまうものが多い。

世界のミンク毛皮の生産量は，1970～1971年で約2500万枚に達している（これに対し，野生ミンクの生産量は43万枚以下である）。この内訳は，ソ連が最大で580万枚，次がアメリカ合衆国で500万枚，第3位はデンマークで390万枚，以下，北ヨーロッパ3国がこれにつづき，日本は第11位である。そのほか，東西両ドイツ，イギリス，フランス，イタリア，スペインで養殖が行なわれ，最近は，南アメリカのアルゼンチンでも生産が始められ，年間2万枚を数えるようになった。

日本では，毎年平均25万枚が生産され，そのうち国内消費量は10万枚である（ソ連の消費量は，実に350万枚）。この数字をささえる毛皮産業は，大部分が小規模の家内工業で，国内約300か所を数える。そのうちの大部分が，北海道にある。その理由としては，第1にミンクの飼料として重要な魚類が北海道には豊富であること，第2に良質の毛皮生産には寒冷地がよいことなど，があげられる。

北海道におけるミンクの飼育は，1940年代前半に始まる。最初は種ミンクとなる雌雄をつがいで空輸し，子を生ませるのに苦労していたが，今では，外国で交配済みの雌だけを輸入している。もっとも，これにしても，ミンクの品種がほぼ出そろった現在では，国内でじゅうぶんまにあうので，珍しいことである。

1年で終わるミンクの生涯

ミンクの交尾期は3月で，この時期が来ると種雄1匹に対して，3～5匹の雌を交尾させる。イタチ科動物に多くみられる卵子の子宮内着床の遅れのため，この動物の妊娠（にんしん）期間は一定せず，38～76日の間であるが，平均45日で出産するようだ。1産5，6子で，多いときは12子生まれた例がある。

5月に生まれた子どもは，6，7，8月の飼育期間に，3匹ぐらいずつ，性別にまとめられ，おりの中で育てられる。屋根つきのおりは大きく育つように日光がさす場所に置かれ，大きい飼育場では，そのおりを左右におさめた一棟が100メートル近くの長さになっている。

養殖ミンクの飼料は，白身の魚（カレイ，タラなど）とクジラ肉を中心に，その他，トリやブタの肝臓，穀類，野菜，ビタミン剤やカルシウムを混合したものである。数万匹を飼育するような大飼育場では，この飼料を調理するため，あたかも一大工場のように，巨大なミキサーがうなり，ベルトコンベヤーが，そのひき肉状のえさを，各棟の近くまで運んでいる。

子どもたちは，こうした食糧と水と日光とをじゅうぶん与えられて育ち，8月になると親と同じ大きさになる。そのころまでには，テンパー防止のため，ワクチンも受け，秋の換毛期にそなえる。

9月，ミンクの下毛は密集し，10～11月で，ほぼ完全に換毛して冬毛になる。このころになると，1匹ずつ別のおりにいれて，争いで毛皮に傷がつかないように管理される。

11月あるいは12月，ミンクの毛皮の色が最良に達する時期（これをプライム prime という）に，かれらは屠殺され，毛皮をはぎとられる（業者は淘汰と表現する）。

ミンクのような高級毛皮の場合，毛質も色つやもプライムの状態に達するのは，わずか7～10日間ぐらいで，これより早くても，おそくても品質が劣る。野生のミンクでは，その選択ができないため，その毛皮が商業ベースにのることがない。また，北海道では，飼育場から逃げたミンクが野生になって，捕獲される例があるが，この場合でも，養殖ミンクにくらべ，毛がすり切れていたり，よごれがあったりで，品質ははるかに劣る。





ミンクの飼育場は，人里離れた広い土地にあり，おりがずらりとならんで壮観だ（上） まもなく淘汰される運命にある成獣（下）。場所　札幌市手稲町
撮影　犬飼哲夫

ミンクコートのできるまで

ミンクの生涯は短いが，その毛皮に永遠の輝きをもたせるための工程が，すぐに始められる。

まず最初に乾皮。淘汰されたミンクの毛皮は飼育場の中にある乾燥室で，薄い板きれにかぶせられて，脂肪をぬかれる。前に述べたオークションに出される毛皮は，この段階のものである。これを原皮ともいう。

第2に，オークションでバイヤーによって集められた毛皮は，薬品処理（ほとんど油なめしを用いる）を経て，毛質と色を最高度に保った永久品へと変わっていく。

第3に，加工業者の手に渡った毛皮はオーバーコートやストール（肩掛け）に仕立てられる。コート1着については，70～80枚，ストールでは6～7枚が必要である。いずれも厳重な選択によって，毛色と毛並みがそろったものを裁断，縫

――――＊＊

──カラーページ注──

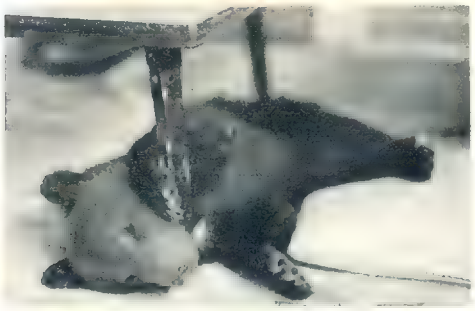
〔注1〕 **受精卵の子宮内着床の問題**　イタチ科の動物の雌では，交尾してから出産するまでの日数が，きわめてまちまちである。

これは第1に，雌は交尾しなければ，卵巣から排卵しない生理機能をもっていること，第2には受精卵が子宮壁に付着して，分裂を始める日数に違いがあることなどが原因である。

一般に雌の体内にはいった精子が生存できるのは，1,2日とされているから，受精に数日以上もかかってしまうとは考えられない。

受精卵は子宮に着床して，はじめて分裂が進行するものだから，着床がおくれれば，したがってまた分裂がおくれ，出産がおくれることになるのだ。なぜ着床がおくれるのか，その原因については，現在まだ不明である。■

（犬飼哲夫）



ヒグマと2人のイノシシ 22

尻と鼻と胸と

畑　正憲

霧多布でどんべえは人気ものになった。早朝から子供たちが集まってきて、窓の外で喚声をあげる。

クマと寝ている人間がいるというのは大人にも興味があるらしく、いきなり部屋へ入ってこられるのには弱った。そういう人に限って動物の扱いを知らず、咬まれてから恐怖心を持つようになるのだ。

人のいない所へ、一刻も早く。

僕はそう思うようになった。飼育用のサンルームを作っておきながら、島へ渡る予定を繰り上げたのはそのためである。

明るい日の下で見るどんべえは、惚れ惚れするほど美しい。黒い毛の光沢はビロード以上だし、小さくて丸っこい耳は縫いぐるみを思わせる。

目はまん丸で、顔に比べると小さい方だろう。瞳は黒でもグレイでもない。うっすら粉をふいた山ぶどうの色。

円形の虹彩の奥には、何とも言えぬ憂愁がある。神秘的な光をたたえ、もろいがたくましい命の詩がある。

どんべえの成長はめざましく、約4日に1キロの割りで体重が増えていく。口のまわりに白い毛が目立ち始め、鼻面から額にかけてめっきり茶色っぽくなった。彼女の姉に当たるタンコも、檻から出して間もなくは、黒い毛が美しい子グマだったそうだ。が今では、肩や背に金毛の方が多い。

僕のもとへきて、どんべえは3回おならをした。そのいずれも、活動的なクマらしく、のそのそ歩きながらかわいい音をたてた。

イヌの場合は、一発落としておいて、不思議そうに自分のお尻をかぐものだが、どんべえは平気な顔をして肩をゆすって歩く。まったく、屁とも思っちゃいないのである。

駆け寄ってお尻を嗅いでみる。だが、「ブ、ブー」という音の割りには気体の量が少ないのか、いつもながらの子グマの体臭を嗅いだだけであった。

その代わり、一緒に寝ていて、こちらがおならをするのは禁物である。思いっきり大きいのをぶっ放してみたら、まず耳を立て、それから嗅ぎにやってきて、鼻をヒクつかせた後でガブリと尻に咬みつきやがった。

痛いの痛くないの。僕は天井まで届く勢いでとび上がった。お尻には比較的神経の分布が少なく、鈍感だというのは閑人のせりふである。日頃咬まれたりしない所だから余計痛い。以後僕は、どんべえが側にいる時には、慎重に屁を処理するようになったが、そうっと放出したのでは、やった気分にならないのには弱っている。やはり屁というものは、所構わず出ものはれものいざごめんと、威勢よく放つものであるらしい。

弟同様、僕も鼻を咬まれた。

後ろから抱いていて、他のものに気を取られていたのがいけなかった。彼女は首をねじ曲げて、渾身の力をふりしぼって食らいついた。

これはお尻以上の痛さである。万力で鼻をつまんで、左右に振られると思えばよい。

血がメガネにとんで、右の目が見えなくなるし、頭がぼうっとなった。

「あ、あ、あ」

見ている人の方が蒼くなったが、へたに手出しが出来ない。

でも僕は、すでに咬まれることには慣れていた。どんな動物だってそうだが、咬まれた際、急に身をひいてはいけない。そのスピードが大きいほど怪我が大きくなる。とはわかっていても、痛さのあまりついからだを引くのが人情という



霧多布でのどんべえは人気者だ。子どもたちは窓の外に集まり喚声をあげる。　「寝る子は育つ」という　どんべえのこの無邪気な寝顔は……（左上）

合している。

この場合の選択は実にたいへんで、同一品種であっても毛並みや色つやの等しいものは数少ないため、時間のかかる仕事であるという。

こうして、製品となったミンクの毛皮は、デパートや専門店に陳列され、消費者の手に渡るのを待つばかりとなる。

消費者（といってもほとんどが御婦人だが）のあいだで流行している製品は、一般にいわれているようなオーバーコートではなく、外出にも室内でも使える上衣やストールが多数を占めている。日本でもミンクのコートやストールを見かける機会が多くなってきたが、それでもまだヨーロッパ、アメリカ諸国の比ではない。

毛皮で一攫千金を夢みた話

ケナガイタチ *Mustela putoris* の毛皮は、ミンクほど高級ではなく、もっぱら大衆向きに利用されている。この動物の毛皮について、戦前（昭和14年）と戦後（同26年）に1回ずつ起きた事件なのだが、こんな話がある。

〝ヨーロッパ、アメリカで流行の高級毛皮〟という触れこみで、生きたケナガイタチを高値で売りつけ、飼育を勧めた者があらわれた。かれらは、最初にこの動物の種売り〔毛皮獣の養殖の基礎となる動物を売ること〕を始めた。飼育者から安値で買いとったものを、巧妙な宣伝で他の者に高値で売りつけ、高い斡旋料をとってもうけたのである。

やがて全国的に普及し、斡旋がゆきづまると、ドイツテンと称して危機を乗り切ろうとしたが、種雄を買って飼育している多数の者から訴えられ、結局、警察に逮捕されてしまった。

この事件を考えてみると、2つの教訓がある。第1は、毛皮に関する人びとの無知。これが利用された。世界の毛皮界の動向がわからず、毛皮の特殊地帯となった日本で、一部の狡猾な者の笛に、多数の人間がバラ色の夢を抱いて踊らされたのである。

第2に、毛皮を扱う場合の行政上の不備がある。日本ではヨーロッパ、アメリカと違って毛皮に関する経験と知識に浅く、被害を防止する法律が完備していない。ヨーロッパ、アメリカでは、ケナガイタチをドイツテンという新（珍）名称で呼ぶことは考えられず、そうした場合は罰せられる。ヨーロッパ、アメリカのように、毛皮を取り扱う場合に、その動物の動物学上の固有の名称以外は禁ずるようにしなければ、第3、第4のケナガイタチ事件は今後も跡を絶たないであろう。■

ものだ。咬まれ屋になって，体験を重ねなければ，なかなか実践出来はしない。すでに100か所以上の傷を持つ僕は，ニッコリ笑って鼻をどんべえの口の中に押し込み，やっと放して貰った。

指位食い切られるのは仕方がないが，鼻は困る。僕はヘビースモーカーだから鼻がなければけむったくてかなわぬだろう。メガネだってかけられぬ。ハナはだ迷惑なハナしだ。

子グマの咬み傷は，大抵1日で痛みが薄らぐものだが，鼻は咬み易い形をしているためか，3日ほどずきずき痛んで顔がふけなかった。

親から離す時期が遅過ぎたのである。3ヶ月以上も親と暮らした子グマには，〝刷りこみ〟もへったくれもなかった。親のイメージは，ぬぐい難い鮮明さで，どんべえの脳裏に刻まれているに違いなかった。

遊び惚けている折を見計らって，部屋の外へ出てどんべえだけにしてみた。

すると突然，彼女は狂ったように敷きっ放しの蒲団へ駆け戻り，ガバとその上に身を伏せて，例の怪鳥音と共に，乳首を捜す仕草を始めるのだった。ない，あるべきものがない――蒲団にかける爪の音が，彼女の苛立ちを表わしていた。

そんな姿を，どうして黙って見ていられようか。

僕はとびこんで，どんべえに口を吸わした。これは危険でもあるし，かなり痛い作業でもある。ウマやウシはともかくとして，イヌやネコ，そしてクマは，前足で親の乳房を押して乳を吸う。特にクマは手が発達しているため，力を入れて乳房をもみしだく感じがする。

それを僕の顔で再現するのである。爪を僕の頬に突き立てて，出ない乳をどんべえは求めた。

――吸ってくれ。さあ，吸ってくれ。

僕は目をつむった。親の代用品として認めさせるには，他に方法を知らなかった。とにかく，一刻も早く，親を忘れさせねばならぬ。人間とのつきあいのマナーを教えるのはそれからだ。

切なくて，やるせなくて，どんべえは僕の胸に咬みついた。

「どん，どん」

僕は呼びかけた。

「どんべえ，どんべえ」

名を呼ぶしかない。僕の胸の中で野生の子が飼われることが幸か不幸か，などと考える余裕はない。山には帰れぬ所で生まれた以上，人に飼われるのが運命であろう。僕に出来るのは，思い迷うのをやめて，名を呼んでどんべえの背を撫でてやるしかない。

と，いつの間にか，どんべえは僕の胸を咬んだまま寝入っていた。

しだいに力がゆるんで，頭が蒲団に落ちる。それからクシャミを1つ。熟睡する前には，からだの一部に触れていると気分が安定している。その時期の判断を誤ると，折角眠りについたとほっとしたのも束の間，目をパッチリ開けていたずらを始める。

目を完全に閉じるのは，寝入ってしばらくした後だ。はじめは，眠狂四郎の如く半眼の構え。

しばらく黒い部分が見えている。しかしイヌと同じで，本格的に睡魔が襲うと，眼球がくるりと前へ回転して，半月形の窓には白い部分が現われる。

人でもけものでもそうだが，幼い時分には，どうしてこう白目が綺麗なのだろう。淡い青が底にあって，名工が作った青磁を思わせる。どんべえには，太い毛細血管の飾りもある。

眠ってからも，結構変化がある。四肢をヒクヒクさせたり，ため息をついたり，時にはうなり声をあげたりする。と思うと，半身をもたげ，不思議そうに辺りを見回して，千鳥足で寄ってきて，僕のひざを枕にしてまた眠り始める。

どんべえだって夢を見るに違いない。そのありさまを見ていて妻が言った。

「人の赤ん坊そっくり。まったく同じ動作だわ。でも目が醒めると，シカゴのギャングみたい」

このままの大きさなら，ギャングであっても僕は構わぬ。しかし成長するからには教育を施さねばならぬ。それが厭で厭で，僕は逃げ出したい位だった。■

鳥獣むかしばなし 2

うぐいすの里

再話　稲田和子　え　赤羽末吉



とんと昔があったげど。

村の若い男が，ある朝早く山へ草刈りに行ったと。すると，山のうぐいすが怪我でもしたのか，羽をバタバタさせて苦しんでいるのを見つけたと。

「おう，お前は小さいものが気の毒に」

男はうぐいすをつかまえてもどると，傷の手当てをして，しばらく家で飼ってやった。そうしてすっかり傷がよくなってから，元の山へ放してきたと。

それから何日かたって，やっぱり朝早く山へ入っていくと，いとしげな姉さんが出て来て，こんなに話しかけるんだと。

「お前を面白いどこへ連れて行ぐすけ，目をあけれというまで，しっかり目をしぐってくれや」

言われるままに，男は目をつぶっていたって。

「さあ，目をあけれ」

と言う声に，目をあけて見たれば，山の中だというのに，きれいな御殿のようにでっかい家に来ていたって。ふしぎなことに，それは一軒家なんだと。



「おらどこは，おらひとりだすけ，なじょうも，いつまでも泊まってくらっしゃい」

と言うて，いろいろとごちそうを出してくれたと。酒も飲ませてくれたと。男はいい気持になって，ひと晩とまりふた晩とまり，家へ帰ることも忘れて，そこで何日も暮らしていたって。

ある日のこと，姉さんは，

「今日は，おらは下の村に用事があって行ってくるすけ，お前は留守居をしていてくれ。おらどこには，家の奥に12の座敷がある。ほかの座敷はどこを見たっていいども，2番目の座敷だけは，どんなことがあっても決して見てくれんな」

そう言いおいて，どこかへ出ていったと。

若い男は言われたとおりに留守番をしていたが，どうも奥の座敷が見たくてたまらないんだと。まず見てもいい座敷をあけて見た。順々にあけて見たところが，どこもきれいな花ざしきだって。

1番目は，1月の松にしめかざり
2番目は，見るなのざしき
3番目は，3月の桃の花ざかり
4番目は，4月の桜の花ざかり
5番目は，5月のしょうぶの花ざかり
6番目は，6月のぼたんの花ざかり
7番目は，7月のはぎの花ざかり
8番目は，8月のすすきの白い穂
9番目は，9月の菊の花ざかり
10番目は，10月のもみじのさかり
11番目は，11月の霜がれけしき
12番目は，12月の雪げしき

しまいに男は，とうとう2月の，見るなといわれた座敷をそっとあけてのぞいたって。みれば娘うぐいすが1羽いて，梅が咲きにおう座敷の中を，あっちへ飛び，こっちへ飛びして遊んでいる。

「ほう，これは見るなといったはずだ。見事な座敷だわ」

と思ってそっと戸をしめ，知らん顔していた。もとの部屋へ帰って炉ばたに横になっていると，コロッコロ，コロッコロと下駄の音がして姉さんが帰ってきた。

「お前は，なんちゅうことをしてくれたや。あんげに『見てくれんな』言うた座敷を見てしまったのし」

「いや，おらは見てない」

「いや，見た見た。おらにはちゃんとわかっている。おらはお前に助けられたうぐいすだ。もしお前があそこを見なかったら，お前と夫婦になって暮らそうと思うたのに，2月の座敷を見られたからには，ここの暮らしはできねえから」

そういうと，娘は1羽のうぐいすになって，ホーホケキョ，ホーホケキョと悲しげに鳴きながら，たっていってしもうたと。

すると，あんなにでっかい家もなにもかも立ちどころに消えてしまって，気がついてみれば，男は深い山の藪の中にいたとや。

いちごさけもうした。■

（新潟地方のはなし）

海中動物の生活

写真と文　館石　昭

7　海底の深夜族

夜歩きを始めるゴンズイ　水深8メートル　宮崎・日南海岸にて



人間の社会では，昼は働き夜は寝るのがふつうのようだが，最近は深夜族がどんどんふえて，大都会では昼夜の別がなくなる傾向である。海のなかでの深夜族は，人間社会のそれよりも，ずっとむかしから活動をしてきたようだ。

エビの類，そのなかでもイセエビは深夜族の代表格で，昼は海底の薄暗い洞穴の中に目だたないように隠れていて，なかなか見つからないものだが，夜になると洞穴から外へ出て，えさあさりを始める。

人間がエビの夜行性を知ったのは，いつのころか知らないが，漁師はイセエビをとるためには，エビ網と称する漁網を日暮れどき海底の洞穴の付近，つまり，エビが夜歩きしそうな交通の要所に張りめぐらしておく。翌朝その網をあげるとおいしいイセエビが網にからまって身動きできないままに，船に上がってくるというしだい。エビにとっては，夜歩きは命がけである。

ゴンズイ　は，昼は海底の岩陰で数百匹が丸くかたまって，あまり動こうとしないが，薄暗い岩陰で塊がうごめいているさまは，あまり気持よいものではない。

これも夜歩きが得意で，あたりが暗くなると，昼とはうって変わって1匹歩きをする。曇りの日の夕方の海底はかなり暗いので，気の早いやつは塊から離れて外出を始める。夜，磯釣りでときどき釣れるが，背びれと胸びれに毒針があって危険なので，手もとの暗い夜釣りでは，気をつけないとたいへんなことになる。

ヒトデやウニの類も深夜族で，水中撮影をするには，夜間潜水が効果的な場合が多い。昼でも視界が悪い海底だから，夜になったらまっくらやみで，危険もふえる。しかし，大部分の魚が昼間の敏捷な動きに疲れて，岩陰で波にゆられながら眠っているのを横目でながめつつ，海底の深夜族たちを訪問し，昼とは違った生態を見るのも楽しいものである。もっとも，イセエビみたいに，エビ網にはひっかかりたくないが――。■

（水中写真家）

仲間のひろば

ハムスターのメスヤン

ぼくはいま，ゴールデンハムスターを飼っている。名まえは〝メスヤン〟とつけた。雌だからである。

メスヤンはとてもかしこい。ベンざらの上に紙を入れて，水にひたしておくと，そこをお便所にする。部屋のなかへ出す前は，たいていおしっこをしていく。また，外でおしっこがしたくなると，そわそわするのですぐわかる。はずかしがりやで，ぼくがじっと見ていると，おしっこを途中でやめてしまう。

きたないことだが，ハムスターはうんこを口でほじくってぷいとすてる。おしっこはきまった場所にするのに，うんこは，するところがきまっていない。その理由は，たぶんおしっこはとてもくさいが，うんこはあまりくさくないからだろう。しかし，うんこは，自慢じゃないけれども，だいているときなどや，部屋のなかではしたことがない。

メスヤンは，ぼくにとてもなついている。「メスヤンおいで」というと，ひょこっと巣から首を出すし，手の上にも乗ってくる。メスヤンはあいきょう者で，ズボンのスソからのぼってきたり，カーテンのてっぺんまでのぼることもある。またおかしなことに，飼い主に似てするめが大好きである。

本には，ハムスターは気が荒いと書いてあったが，いやがることさえやらなければ，ぜったいにおこらない。デパートから買ってきた当時は，なかなかなつかなかったが，チョコレートやビスケットなどを手のひらでやるうちに，だんだんなれてきた。はじめはおしっこをかけられたりしたが，いまでは絶対にしなくなった。ぼくにとってメスヤンは，ダイヤモンドよりもたいせつな宝物である。■

（大阪市・盛　修一・13歳・中学生）

ペット相談室



担当
高橋達志郎
（小鳥の病院院長）

〈問〉　セキセイインコのくちばしのまわりや脚（あし）に，白い粉のようなものがついてガサガサになり，くちばしも曲がってきました。この病気の原因と治療法を教えてください。（宮城県・高橋修）

〈答〉　セキセイインコの皮膚病の一種で，疥癬症だと思います。疥癬虫によって発症する伝染性の皮膚病です。

疥癬虫の大きさは，雄が150ミクロンぐらい，雌は雄より大きく300～400ミクロンぐらいあります。顕微鏡で調べると，雄の成虫は非常に少なく，雌の数のほうがはるかに多いことがわかります。

雌の腹のなかには，卵子が透きとおって見えますが，未成熟卵と成熟卵がはっきりとわかります。おそらく卵胎生なのでしょう。雄の成虫と幼虫は活発に動きまわりますが，雌親は脚が短く，動きが鈍いものです。

この皮膚病は，セキセイインコに非常に多いのですが，フィンチ類の一部にも伝染することがあります。

はじめ，くちばしの根もとや眼瞼に，ポツンと白っぽいものができ，そのうち小鳥はかゆみのために，止まり木やかごの周囲に顔をなすりつけるようになります。その後，出血したり脱毛したりして，肉芽ができてイボのようになっていきます。

くちばしはおかされると軽石のようになり，異常にのびたり，上くちばしと下くちばしが交差してしまうこともあり，全体にもろくなります。

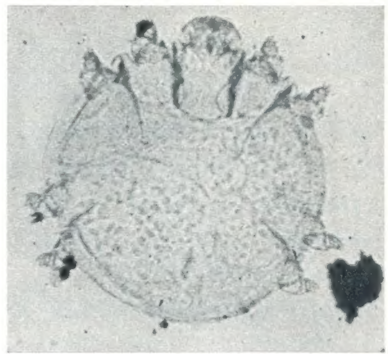
治療には硫黄剤を用いますが，とくに二硫化セレンの含剤は有効です。1日おきか2日おきに，3，4回繰り返して治療をしてやりますが，薬が目や口のなかにはいらぬように，注意しなければなりません。全身にひろがっている場合には，薬浴をしてやるとよいでしょう。■

〈問〉　手乗りのセキセイインコの雌と，ふつうのセキセイインコの雄とでは，卵を生みませんか。友だちの話だと，雌が手乗りの場合は卵を生まないし，世話をしない，といっていますがほんとうでしょうか。

（高知県・深瀬真弓・13歳・中学生）

〈答〉　あまりよく人になれた小鳥は，巣引き（子どもを育てるための一連の動作）をすると，たしかにおちつきがなくなり，失敗することが多いのですが，必ずしもそうではなく，じょうずに巣引きをする場合もあるので，一応ためしてみたらよいと思います。■

疥癬虫の雌



裏表紙説明

ノロジカ　ヒースの花のなかから，耳をそばだて，大きな目で神経質そうにじっと遠くを見つめているのは，ノロジカ *Capreolus capreolus* の子ども。ユーラシア大陸の温帯林にすんでいる。臆病者で，人間のにおいをかぎつけると，すぐに逃げてしまうから，イヌのような高い鳴き声を聞くことはよくあるが，なかなか姿は見られない。

夏の間はこのように赤茶色の毛皮だが，冬になるともっと暗い茶色に衣がえをする。繁殖期には雄が雌を追って円を描いて走り，「ノロの輪」と呼ばれる足跡を残すという。

ふだんは母と子がいっしょに生活していて，木の葉や草を食べる。写真の子ジカは，朝の食事に出かけたところだろうか。すぐ近くには，母親が心配して待っているに違いない。■　Ph. A. Fatras

▶訂正　19号20ページ左段見出し，ユキヒョウの学名 *Panthera unica* は，*Panthera uncia* の誤りでした。

黒き猫　　菱田春草



明治43年の第4回文展に，菱田春草はこの絵を出品した。妻をモデルにした雨中美人の屏風画を準備していたのが間に合わず，急いで変更したものと伝えられる。柏の幹に1匹の黒猫がうずくまり，じいっとこちらをみつめているだけの，簡潔な画面である。静まりかえった秋の庭に，時折，葉の落ちる音がひそかに聞こえてくる心地がするが，そのなかに，素地を塗りのこした輪廓で描かれた黒猫の姿がくっきりとうきだして，なにか異様な気配をただよわせている。猫のらんらんと光る眼は，そこに春草が，この絵の生命をかけたかのごとく精気を放ち，絵を見る私たちの心が猫に見通されるようだ。猫という動物は，瞳の妖しく変化するきらめきによって，独特の印象を私たちに与えるが，そういう感じが明瞭に表現されている，すぐれた作品である。数多い猫の絵のなかでも，特異な名画と言うべきであろう。春草は，横山大観や橋本雅邦らとともに，明治の新しい日本画の創造を目ざして，若若しい情熱を傾けた画家であった。前の年に文展に出品した「落葉」という作品は，自然を静かに見つめて，それを新鮮な画面に構成した異色の作だった。「黒き猫」は，その自然観察をよりいっそう深め，情熱が外に発散するのをきびしく抑えて内に沈潜させ，装飾画風に画面を美しくととのえてある。しかし，息づまるような鋭い緊張感は，春草がみずからを形式の拘束のなかへ追いこんでいるような，一種のいたましさを感じさせるのである。この猫は春草自身ではなかったのか。かれは，翌明治44年の9月，失明状態のまま，数え年38歳の短い生涯を閉じた。■　（水尾比呂志）



絹本着色
150×51センチ
永青文庫蔵

第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

1 概説 I　生態学，自然保護
2 概説 II　動物分類学，生物学的環境
3 霊長目　ゴリラ
4 霊長目　チンパンジー，オランウータン
5 霊長目　テナガザル，オナガザル
6 霊長目　カニクイザル，ヒヒ
7 霊長目　キヌザル，オマキザル
8 霊長目　メガネザル，キツネザル，アイアイ
9 食虫目　ツパイ，モグラ，ハリネズミ
10 翼手目，皮翼目　コウモリ，ヒヨケザル
11 齧歯目　ヤマアラシ，チンチラ，ミズブタ
12 齧歯目　トビネズミ，ヤマネ
13 齧歯目　家ネズミ，野ネズミ
14 齧歯目　レミング，ビーバー，ハムスター
15 齧歯目　リス，ムササビ
16 齧歯目　ウサギ
17 食肉目　チーター，ライオン
18 食肉目　トラ
19 食肉目　ヒョウ，ジャガー
20 食肉目　ピューマ，ヤマネコ
21 食肉目　イエネコ
22 食肉目　ハイエナ，マングース
23 食肉目　ジェネット，カワウソ
24 食肉目　スカンク，アナグマ
25 食肉目　テン，クロテン
26 食肉目　ミンク，イタチ
27 食肉目　パンダ，アライグマ
28 食肉目　マレーグマ，ホッキョクグマ
29 食肉目　ヒグマ，ツキノワグマ
30 食肉目（畜犬）　盲導犬，警察犬ほか
31 食肉目（猟犬）　グレーハウンド，セッター
32 食肉目（番犬）　コリー，セントバーナード
33 食肉目（ペット犬）　ニホンイヌ，チワワ
34 食肉目（野生犬）　ディンゴ，リカオン
35 食肉目　キツネ，ホッキョクギツネ
36 食肉目　オオカミ，コヨテ
37 食肉目　アザラシ
38 食肉目　セイウチ，オットセイ，トド
39 奇蹄目　サイ，バク
40 奇蹄目　ウマ概説
41 奇蹄目　サラブレット，ポニー
42 奇蹄目　ロバ，ラバ，シマウマ
43 岩狸目，長鼻目　イワダヌキ，ゾウ
44 偶蹄目　カバ，ペッカリー
45 偶蹄目　イノシシ，ブタ
46 偶蹄目　ヒツジ，ビッグホーン
47 偶蹄目　ヤギ
48 偶蹄目　ヤギ（飼育種）
49 偶蹄目　レイヨウ
50 偶蹄目　ブラックバック，クロレイヨウ
51 偶蹄目　ダイカー
52 偶蹄目　アフリカスイギュウ
53 偶蹄目　ウシ，コブウシ
54 偶蹄目　クードウ，プロングホーン
55 偶蹄目　キリン，オカピ
56 偶蹄目　トナカイ
57 偶蹄目　シカ
58 偶蹄目　ラクダ，ラマ
59 貧歯目，有鱗目，管歯目　アリクイほか
60 海牛目，鯨目　ジュゴン，ナガスクジラ
61 鯨　目　イルカ，マッコウクジラ
62 有袋目　カンガルー，コアラ
63 有袋目　バンディクート，フクロネコ
64 単孔目　カモノハシ，ハリモグラ
以下 65～128 鳥類　129～144 両生類，爬虫類
145～160 魚類　161～192 昆虫類，甲殻類

世界動物百科　通巻24号　昭和46年8月22日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人 大田信男　発行所 朝日新聞社　東京 大阪 北九州 名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



ノロジカの子ども　説明 30ページ

雑誌コード 0634